〔資料紹介〕

立命館大学図書館蔵『一順再返』について

川崎　佐知子

立命館大学図書館蔵『一順再返』一幅（請求記号〈911.2/H96〉、資料番号〈1100032889959〉、以下「立命館大学本」と称す）を紹介する。

立命館大学本は、現状改装の軸装である。総丈は竪一三一・五糎、横九八・五糎。本紙は、寸法竪三四・〇糎、横八七・六糎の楮紙。内容は、はじめに「廿三日」とあるのに続き、作者名「御」、すなわち夢想の発句「梅の宮めてたき御代をあふかんと」と「うへし小松の緑そふ春」の一継、つづけて、作者名「杉」の「解てゆく氷に池の水はれて」以下二十八句を書く。冒頭の一句より三句までは、近衛信尹（当時は「信輔」であるが、本稿では「信尹」とする）筆。以下は、複数名の筆が混じる。

立命館大学本の発句は、『連歌総目録』（明治書院　一九九七年）によれば、まったく一致するものはないものの、慶長二年（一五九七）正月二十三日、近衛殿で張行された夢想百韻のそれに近い。伝本に、宮内庁書陵部蔵『夢想連歌』（函号〈456―51〉、発句「梅の宮めてたき此代あふ人と」）、および同蔵『連歌集』（函号〈353―56〉、発句「梅の色めてたき御代□あふかんと」）とがある。立命館大学本は、その一順再返であろうと思われる。

一順再返とは、興行に先立ち、連衆に一巡箱を回し、一順再返を済ませておくことである（『俳文学大辞典』〔角川書店　一九九五年〕「一巡」「一巡再篇」「一巡談合」「一巡箱」項）。宗牧（谷氏、生年不詳―一五四五）の『当風連歌秘事』に、つぎのようにある。

> 只今京都には、兼載の風より以来、宗長・宗碩以来、発句等出来候へば、五、三日以前より一順を文箱に入て、人衆の次々へ送り侍る也。然間、何も好士の宿へ持参して談合する也。殊更、初心遅口の人は、俄案ずる事難叶故、前広にその沙汰あるべし。一順・再篇、尚以たしなみの事肝要也。其上、世間の沙汰にも、先発句、一順・再篇ならでは、諸国諸人の沙汰なしと也。
>
> （『当風連歌秘事』）

一順再返は、兼載（猪苗代氏、一四五二―一五一〇）、宗長（号柴屋軒、一四四八―一五三二）、宗碩（号月村斎、一四七四―一五三三）以来の京都でのならわしという。

立命館大学本には三十句が記される。はじめの長句短句は夢想であり、残る二十八句を十人の連衆で回す。回す順は一巡目と二巡目で少し前後がある。「廿三日」は、この一順再返が連衆に回された日と思われる。通常、五日あるいは三日ほど前に回すものではあろうが、何らかの事情で、興行当日の慶長二年正月二十三日となったものか。

一巡のならびより、会の亭主は近衛信尹、宗匠は昌叱と考える。連衆について述べる。一字名の「杉」は近衛信尹（近衛家第十七代、一五六五―一六一四）、「春」は近衛前久（近衛家第十六代、近衛信尹父、一五三六―一六一二）、「白」は照高院道澄（近衛家第十五代稙家男、近衛信尹叔父、一五四四―一六〇八）である。いずれも近衛家とその一族である。

「兼勝」は広橋兼勝（一五五八―一六二二、慶長二年正月当時は従二位権大納言）、「光豊」は勧修寺光豊（一五七五―一六一二、慶長二年正月当時は正四位上右中弁蔵人頭）、「時慶」は西洞院時慶（一五五二―一六三九、従三位右兵衛佐）である。このうち、広橋家と西洞院家とは近衛家門流である。

「昌叱」は連歌師昌叱（里村、一五三九―一六〇三）、「玄仍」は玄仍（里村、紹巴男、一五七一？―一六〇七）、「景敏」は昌琢（里村、昌叱男、一五七四―一六三六）である。いずれも連歌師である。「玄與」は玄與入道黒斎（阿蘇惟賢、生没年不詳）で、肥後阿蘇神社の神官の人。当時は薩摩の島津氏に仕えていた。

張行時の慶長二年正月前後の状況を確認する。文禄三年（一五九四）四月一日、前左大臣近衛信尹は、豊臣秀吉の上奏により勅勘を蒙り、薩摩坊津へ配流される。以後、文禄四年八月に謫所が鹿児島にかわり、文禄五年四月、豊臣秀吉の上奏で勅勘が解かれるまで、近衛信尹は在国を余儀なくされたのである。同年七月十日に鹿児島を出、九月十五日に帰京。道中の詳細は、命を受けて随行した玄與入道黒斎の『玄與日記』に記される。

『玄與日記』は、文禄五年七月十日より慶長二年三月二十三日までの日次記である。[1] 日記の前半は近衛信尹帰洛の海路・陸路を、和歌・聯句で織りなす。後半は、伏見・京に滞在した玄與入道黒斎の、近衛信尹・細川幽斎（一五三四―一六一〇）・紹巴・兼如（猪苗代、―一六〇九）などとの文事交流を描く。この後半部に、慶長二年正月二十三日の張行も書き留められる。

廿三日近衛様にて連歌御興行。昌叱。其外広橋殿。勧修寺殿。西洞院殿なと。拙子も御連衆也。

（『玄與日記』慶長二年正月二十三日条）

伏見の細川幽斎館で越年した玄與入道黒斎は、慶長二年正月十六日、近衛信尹よりの御書を受け、同十九日上京。同二十一日・二十二日と近衛殿に祇候し、右の連歌興行である。右の記事に書

きとどめられる連衆「昌叱」「広橋殿」「勧修寺殿」「西洞院殿」は、立命館大学本の連衆に一致する。

このほか、『玄與日記』には、慶長二年二月六日、近衛家桜御所にて連歌・当座、同年二月二十四日、近衛信尹の発句で、山名禅高（一五四八―一六二六）・岡野江雪斎（一五三七―一六〇九）と一折、同年三月一日の帰薩前に、近衛信尹が餞別の和歌を贈ったことなどの記事がある。立命館大学本は、帰洛後まもなくの近衛信尹の動静をうかがわせる資料といえよう。

成稿にあたり、立命館大学図書館より貴重資料の閲覧・翻刻の許諾を得たことを深謝する。

本研究は、JSPS科研費17K02435の助成を受けたものである。

注

（1）『玄與日記』は、『群書類従』（日記部六・巻三二五）を参照した。『玄與日記』、および記主の玄與入道黒斎に関しては、『群書解題』（続群書類従完成会）、白井忠功氏「京都の黒斎玄與―『玄與日記』」（『立正大学國語國文』第二十六号　一九九〇年三月）、馬場萬夫氏『日記解題辞典　古代・中世・近世』（東京堂出版　二〇〇五年）「玄與日記」項、『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー　二〇一四年）鈴木元氏執筆「玄與」項、亀井森氏・生田美津希氏「鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵『阿蘇墨斎玄與近衛信輔公供奉上京日記』翻印」（『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』六十八巻　二〇一七年三月）を参考にした。

〔凡例〕

立命館大学図書館蔵『一順再返』一幅（請求記号〈911.2/H96〉、資料番号〈1100328959〉）を翻刻する。翻刻に際しては、原文に忠実であるよう努めたが、つぎの方針のもと、手を加えた箇所がある。

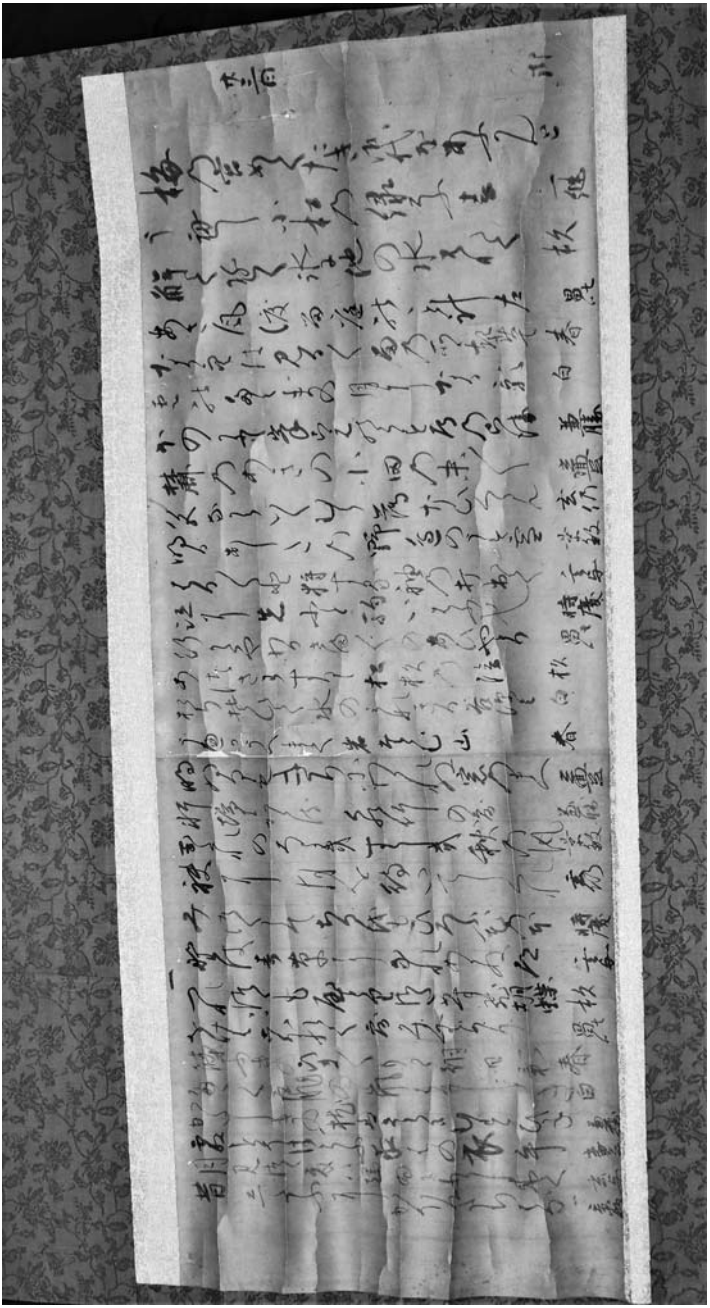
一、漢字は、原則として通行字体を用いた。
二、仮名遣いは、原則として原文のとおりとした。
三、改行・字高は、原則として原文のとおりとした。
四、各句のはじめに、算用数字で私に通し番号を付した。
五、とくに注すべき事項を、（　）内に示した。

〔翻刻〕

廿三日

1 梅の宮めてたき御代をあふかんと　御
2 うへし小松の緑そふ春　一継
3 解てゆく氷に池の水はれて　杉
4 あさ風渡る庭の丶とけさ　昌叱
5 なか空はみる〳〵雨のそ丶ききて　春
6 雲のたえまの月になる影　白
7 ほのかにも峰こえのこす雁のこゑ　兼勝
8 麓のあきの小田の末〳〵　光豊
ウ9 色なからいくむら薄なひくらん　玄仍
10 明るあしたの野辺のうす雪　景敏
11 はる〳〵と狩する袖の打出て　玄與
12 跡に先にと駒いはふ也　時慶
13 行かたやわかさま〳〵のあひやとり　昌叱
14 あつさわする丶松杉の陰　杉
15 おちそひて水のみなきる谷深み　白
16 うへかうへまて岩たゝむ山　春
17 明ぬるもきりにわかれぬ窓のまへ　光豊
18 軒端にかゝるくれ竹の露　兼勝
19 玉たれのそよきす丶しき秋の風　景敏
20 袂に月を待いてしくれ　玄仍

21 みつくしてちるをもひろふ花の本　時慶
22 野は青草になれあかぬ道　玄與
〔三〕
23 つれつゝもやとりさためす飛胡蝶　杉
24 をけはこほれて露かすむめり　昌叱
25 篠ふきのひま〳〵もるゝ朝日影　春
26 たゝく扉の嵐はけしき　白
27 かたしきの枕はさらにむすひかね　兼勝
28 霜をそはらふ夜はの衣手　光豊
29 月見つゝ夏は端ゐにふかし来て　玄與
30 昔したふにかほるたちはな　景敏



（かわさき・さちこ　本学教授）